＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まなサポ京教

～中学生の居場所づくり活動～

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要など

１．「まなサポ京教～中学生の居場所づくり活動～」
　伏見区を中心に、子どもたちが安心していられる居場所づくりや学習支援をする活動を行っている。

２．代表者および構成員
・代表者
鳴橋杏里　国語領域専攻　２回生
・構成員
大倉海翔　技術領域専攻　２回生
松田凌　数学領域専攻　２回生
戸髙雛　教育学専攻　１回生

３．助言教員
伊藤悦子先生（教育学科）

第２章　内容や実施経過など

１．放課後教室
（1）フリスク
時間：毎週月曜日　17 時頃～20 時半
場所：伏見いきいき市民活動センター

元々龍谷大学政策学部のまなサポ＋１という団体が実施していた活動である。2016 年度はボランティアとして個人で参加していたが、情報共有やよりよいサポートの提供のため、京都教育大学の学生も団体として連携していくことになった。

フリスクの目的は、中学生への居場所づくりをすることである。居場所を探している子どもたちが気軽に来ることができる場所を作るという活動をした。

基本的に来た子どもたちには、大学生が１対１で対応する。子どもたちが持ってきた宿題をみてあげることが多いが、勉強しながらも子どもたちの話を聞いてあげたり、気持ちに寄り添ったりすることを重視している。子どもの気分によっては、勉強せずに話したり遊んだりして時間を過ごすこともある。

また、＋１の活動として、ごはんを一緒に作って食べる「まな食」やお楽しみ会などにも参加した。

（2）STUDY ONE
時間：毎週金曜日　17 時～19 時
場所：伏見いきいき市民活動センター

フリスクの目的を見直す上で、居場所づくり活動と学習支援活動は分けて行うべきだという意見が出たため、まなサポ京教として新たに、別日に学習支援中心の放課後教室を始めることにした。まなサポ京教におけるメインの活動はこの STUDY ONE である。活動は後期から始めた。フリスクに来ている子の中で、受験を控えた中学３年生を対象に呼びかけをし、4～5 人が来てくれている。

STUDY ONE では、会話をしたり遊んだりするなど和やかな雰囲気のフリスクとは差別化し、学習に適した環境づくりというものを意識した。居場所支援では、保護者の帰りが夜遅い子のためもあり長めの時間設定となっているが、だらだら勉強するより決まった時間の中での学習の方が集中しやすく良いという考えのもと、2 時間という時間設定にした。ただし、居場所としての役割も切り離して考えることはできず、その一端を担っているため、フリスクと同じ部屋で行っている。

また、藤森中学校の先生との連携もしている。情報共有をする、来なくなった子たちに声をかけてもらうなど、学校側と連絡を取り合うことでより子どもを包括的にサポートすることができる。

来た子どもたちには、持参した宿題や用意している問題集など、それぞれが取り組む勉強において、わからないところを教えたり、学習法を提示したりしている。

また、中３生の高校受験に向かっての取り組みとして、普段の STUDY ONE とは別に、冬休み中の学習会を４日間開いた。

２．他団体の活動の視察

大阪西成にある「こどもの里」を視察してきた。「こどもの里」は、様々な事情がある子どもたちの居場所支援をする事業所である。何か制限を設けたりすることはなく、地域の遊び場として開放していることで、いつでも誰でも入ってきやすい、助けを求めやすい居場所とされている。

実際に「こどもの里」に訪れた子どもたちの話など、具体的な事例を中心にお話しいただいた。

３．講演会

伏見いきいき市民活動センター長であり、日頃活動に関する助言をいただいている三木俊和さんを本学にお招きし、ご講演いただいた。

伏見区、特に伏見いきいき市民活動センター周りの住民の状況や子どもたちの事例、居場所づくり・学習・福祉の活動の狭間の問題などについてお話しいただいた。

第３章　結果や成果など

１．放課後教室

（1）フリスク

子どもにとっての居場所とはどういうものであるかということを学ぶことができたと思う。

子どもたちの居場所として、家庭や学校が考えられるが、その他にも、子どもたちが安心して行きたいと思えるような居場所づくりが必要だと感じた。それには、ただ場所を提供すればよいというだけではなく、そこにいる人との関係性や雰囲気まで考えなければならないということをひしひしと感じた。学習がメインではないフリスクでは、大学生とのお喋りを楽しみに来ている子もいる。

また、子どもの気持ちに寄り添うということについて考えられたと思う。

活動に参加した当初は勉強を教えることに必死になってしまっていたが、子どもたちは勉強すること以外の目的も持って来ているため、子どもの様子や要望に合わせて勉強の時間を調節する、あるいはなしにするという判断をしなければならないということに気付いた。私たちが一方的に教えるのではなく、子どもがその時どういう状況でどんなことを感じているのかを読み取るにはどうすれば良いか、というコミュニケーションの方法を探ることができた。

（2）STUDY ONE

STUDY ONE では、学習を進めるための居場所の重要さが分かった。

子どもたちの中には、塾に行っておらず１人で勉強を進めにくい子もいる。学校でも放課後学習教室を開くなど対策を取り始めているが、そうした活動でもカバーしきれない子どもたちがいるということが分かった。そうした背景から、STUDY ONE には、支援の場を学校外に移したことで、より子どもをピンポイントで支援しやすいという強みを感じている。一方で、やはり事細かなフォローは学校以外のところでサポートしていかねばならないという現状の厳しさが見えた。

また、勉強を教える中では、学習方法の定着が困難であるということを強く感じた。

STUDY ONE では、子どもたちが問題に取り組んでいる横に大学生がついて、わからない問題の解き方を教えながら一緒に進めていくような形で学習支援を行った。しかし、そこでこれからも使えるような解き方や考え方を教えたとしても、子どもたちにとってはその場の話にしか過ぎないのである。話を聞いていると、家で机に向かう習慣や教えてもらったことを復習する習慣はなかなか見えてこなかった。家庭学習、ひいては日常の学習への取り組み方についてどう導いていけば良いかということが、この学習支援活動においては大きな課題点となっていることが分かった。

２．他団体の活動の視察

私たちの活動と同じような問題を一つのテーマとして持っている活動団体だったが、長年やってこられた中で、他の問題を抱える子も幅広く受け入れている、地域との連携もあり地域にその活動が浸透しているなど、驚くほどよくつくり上げられてきた活動だと感じた。ここまで達するには時間やお金を用意したり、事業所という力を使ったりする必要もあると思うが、一種の目指すべき点が見えたような気がした。

また、子どもが抱える問題としてだけではなく、家庭が抱える問題としても捉えて活動されているのを見て、新たな視点に気付くことができた。

３．講演会

ご講演いただいたのは普段活動の相談をさせていただいている方だったが、講演会を機に、今まで深くは知ることのなかったことまで知ることができたと感じた。

特に、フリスクから STUDY ONE の活動を始める時にもぶつかった問題である、それぞれの活動目的とその関連性については、新しい見方を取り入れることができた。初めは居場所づくりと学習支援の場は分けた方が良いのではなかという発想から２つの活動を並立して行っていくことになったのだった。しかし、STUDY ONE の活動の中で、この教室にも居場所的な意味が少なからず含まれていると感じるようになっていた。そうした流れもあって、居場所づくりと学習支援の場、また家庭や学校、塾でやっていることや身につけられることは重なり合っているという見方は印象強かった。切り離して考えるよりむしろ、居場所づくりと学習支援は関連させて考えること、また学校や家庭、塾での役割を考えつつ、子どもが学校・家庭・塾で得られていないことについての支援をするという視点を持っておくことは重要だと感じた。

伏見区の状況について数値的にも知ることができ、これから学校外や家庭外の支援の需要は増えていくということも分かった。

第４章　まとめと反省、今後の展望など

フリスクでのボランティアから団体として再出発したわけだが、団体として活動するにあたって、あらためて課題に対してどのようなアプローチができるか、また、現状などについても考えることができ、団体結成をしたことは非常に有意義であったと思う。また、STUDY ONE の活動を開始する、他の方の話を聞く機会を設けるなど、活動の幅を広げることができたことは良かったと思う。

一方で、1 年間の活動の見通しが立っておらず、夏休みの学習会の企画が流れてしまう、動き出しが遅くなってしまうなどしてしまった。先のこと、特に高校受験に向けて計画を立てながら活動していくことが必要だと感じた。

学習支援と居場所づくりの兼ね合いを考えた活動のあり方、学習方法を定着させるためのアプローチの仕方など、活動を通して見えてきた課題に対しても、これから考えていきたいと思う。